

# 学生対応のデザイン ～「知の総和」答申を受けて～

2025年12月13日  
教務課題検討フォーラム

近畿大学  
竹中 喜一

# 自己紹介

- 石川県金沢市出身
- 教育工学(人はどうやったらよく学べるか)が専門
- 民間企業(4年)、事務職員(10年)、教員(8年目)。現在はFD・IR・教学マネジメントなどを中心に担当
- 著書に『シリーズ大学教育の質保証 2 学習成果の評価』(編著)、『大学SD講座4 大学職員の能力開発』(共編著)、『大学の学習支援Q&A』(分担執筆)など



# 本トピックのねらい

- 「知の総和」答申をきっかけに、アカデミックアドバイジングやアドバイザーという言葉が注目されるようになりました。では、教務部門の職員が担ってきた学生対応はどのように変化することが求められているのでしょうか。窓口で日々起こっている現実を踏まえ、アカデミックアドバイジングに留まらない教務部門の学生対応の今後を考えるきっかけとします。

# 「知の総和」答申

- 「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）」
  - ・2023年9月、文部科学大臣から中央教育審議会へ「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方」を諮問
  - 2025年2月に取りまとめ
  - ・2040年には、中規模大学90校程度／年減少か？
  - ・今後の高等教育の在り方を「教育研究の『質』の更なる高度化」「高等教育全体の『規模』の適正化」「高等教育への『アクセス』確保」に関する政策の方向性と具体的方策、機関別・設置者別の役割や連携の在り方に言及

（中央教育審議会 2025）

# 「知の総和」答申

ア.学びの質を高めるための教育内容・方法の改善

教育内容・方法の改善については、**個々の学生の学修の質と量を充実**することが何よりも必要である。このため、**授業方法やシラバスの内容の充実、厳格な成績評価や卒業認定の実施、学修支援体制の整備等**、学生が主体的・自律的に学修するための環境構築を促進することが求められる。その際、**各大学等が更に教育力を向上させ、全学的な教学マネジメントの確立を図る**ことが必須である。

具体的には、大学等において育成すべき力を学生が確実に身に付けるために、**三つの方針に基づいて個々の授業科目ごとではない全体のカリキュラム・マネジメントを確立し、教育課程の体系化・構造化を行い、シラバスやカリキュラムマップ、カリキュラムツリー、ナンバリング等を通じて学生等へ分かりやすく示すこと…(中略)…等を通じた教育内容の質向上に向けた取組を行うことが重要である。**その際、**一人一人の学生が深い学修成果を得られる授業設計を行うとともに、シラバス等にその内容が適切に記載され、その内容等に依拠した授業が着実に実施されとともに、授業設計の段階で学生に必要な学修量を明示すること**が求められる。

また、高等教育機関から輩出する人材が**どのような資質・能力を身に付けるのかを可視化し、社会からの理解を得る観点からは…(中略)…学生の資質・能力を引き出し、どのように学修目標の達成に向けて指導していくか、という視点で教育課程をデザインすること**も大学等の重要な責務である。個々の学生の希望や学修の進捗を踏まえつつ、…(中略)…**個人としての目標の設定や達成状況の確認を促し、自分の将来を見据えられるきめ細かな履修指導や学修支援を行うことが必要である。**特に履修指導を行う際には、教員や、教員と対等の立場で学生の学修者本位の学びを支える職員をアカデミック・アドバイザーとして配置することも視野に入れる必要がある。

(中央教育審議会 2025)

# アカデミック・アドバイジング

- 高等教育における教育・学習の使命に基づき、カリキュラム、教授法、そして学生の学習成果を踏まえて意図的に行われる一連の支援である。アカデミック・アドバイジングは、学生の志向、能力、生活の枠組みの中で、大学での学びを統合し意味づけることで、学習をキャンパスの境界や時間的制約を超えて拡張するものである。

(NACADA 2006を筆者訳)

# 具体的な学生の相談例

- 休学したことで、履修計画が他の学生のスケジュールとズレたので悩んでいます。また、履修計画や必要な手続きのタイミングはいつになるのでしょうか。
- 留学行く前にどの科目を何単位取るべきか、また部活や課外活動とバイトのタイムマネジメントを聞きたいです。留学行く前に就活を始めるべきかも相談したいです。
- 卒業要件の確認を一緒におこなってほしい。
- 自分の履修計画が順調に卒業できるのかが知りたいです。
- 大学院進学に興味があります。5年プログラムに興味があります。
- 就活と大学院進学で悩んでいます。

# つまずきはいつでも生じうる

## ■ 入学期

履修、大学での学び方、学習意欲低下  
新しい生活環境への適応、希望進路との葛藤  
友人づくり、部・サークル活動への適応

## ■ 中間期

専門領域関連の取組に焦点、目的意識喪失  
自律的な生活の維持、学業と私生活の両立  
専攻やゼミ選択、卒業後の進路の検討  
友人や異性などとの対人関係

## ■ 卒業期

卒業所要単位の修得、卒業論文・卒業研究  
進路選択への迷い、ゼミ内の対人関係

(羽田編 2015)



# Chickeringの7つの発達課題

コンピテンスの発達	知的・身体的・対人関係能力が未熟で自信がない →それらが発達し自身を持つ状態
感情のコントロール	怒り、不安、緊張などの感情に振り回される →感情を理解し、コントロールできる
自立と相互依存への移行	自己決定が苦手で、独立を依存しないことと考える →自立性もあり、相互依存を理解
大人としての対人関係の発達	差異に寛容でなく、表面的な対人関係 →異なる価値観を尊重し、親密さを築くことができる
アイデンティティの確立	アイデンティティが曖昧 →アイデンティティが確立
目的の発達	漠然としたキャリアの目標 →キャリアや人生の方向性が明確
統合の発達	周囲に流されやすく価値観が一定でない →自分の価値観をもち行動と調和。他者の意見も尊重

(Chickering & Reisser 1993)

# ティップス先生の7つの提案①

- 学生が教職員と接する機会を増やす
  - ・窓口に来た学生がすすんで声をかけ、用件を尋ねる
  - ・日常のキャンパスライフに学生が何を求めているかを聞いてみる
- 学生間で協力して行う学習を支援する
  - ・学生がグループで学習できる場所と利用方法などを把握し、適切なアドバイスをする
- 学生の主体的な学習を支援する
  - ・各種研究会やインターンシップなどの情報を学生に積極的に提供する
  - ・窓口での対応などを通じ、学生に社会人としての常識やマナーを教える
- 学習の進み具合をふりかえらせる
  - ・履修方法と単位取得状況の確認について、学生の自覚を促す  
(名古屋大学高等教育センター 2006)

# ティップス先生の7つの提案②

- 学習に要する時間を大切にさせる
  - ・情報は、要点を整理して提供する
  - ・大学から配布された書類を確認し保存することの大切さを、学生に理解させる
- 学生に高い期待を寄せる
  - ・学生の勉学意欲や課外活動の努力に対し、応援の言葉をかける
  - ・学生の優れた社会的活動をサポートする
- 学生の多様性を尊重する
  - ・窓口対応では、個々の学生の置かれている立場や経験を考慮する
  - ・学生が抱える問題の内容に応じて適切な機関や専門家などを紹介する

(名古屋大学高等教育センター 2006)

# 学生の自律的な学習を支援

- 自己調整学習
  - ・自ら主体的に学ぶ、学びを自分で調整すること
  - ・自身の学習過程に対して能動的に関与するための理論
- 自己調整学習の3つの要素
  - ・動機づけ
    - 動機づけ要因の自己理解
    - 動機づけの促進
  - ・学習方略
    - 学び方を学ぶための支援
  - ・メタ認知
    - 自身の学び方や学習に関する状況のモニタリング支援

# 学生対応のデザインの方向性①

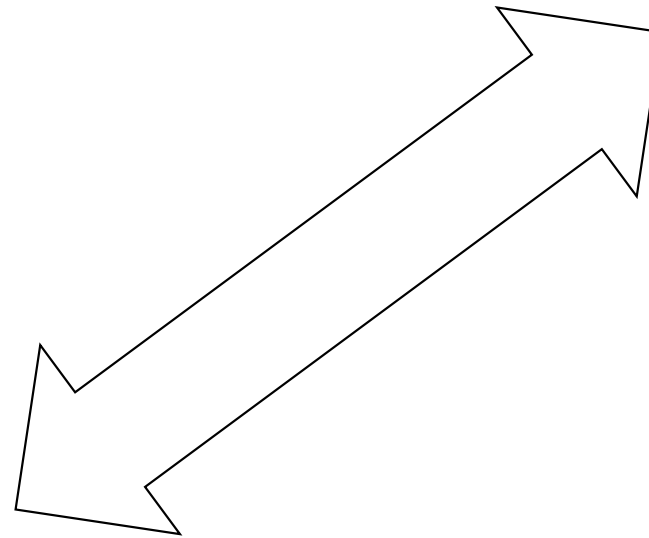
## ■ 教務の窓口は・・・

インターカー

「まず相談してみよう」  
「教務に行けば何かわかるかも」

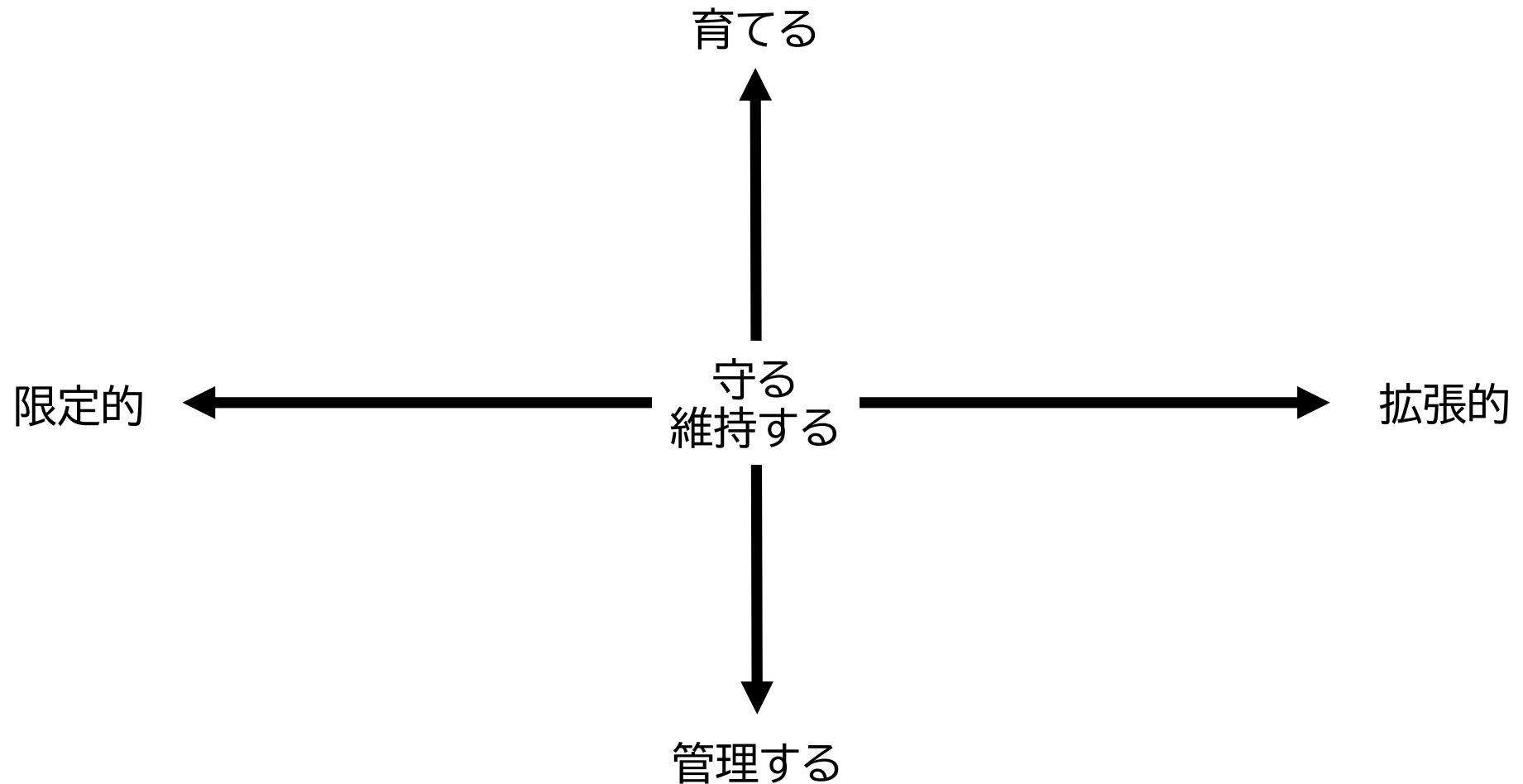
ラストリゾート

「他の誰にも相談できない」  
「退学しようかな・・・」



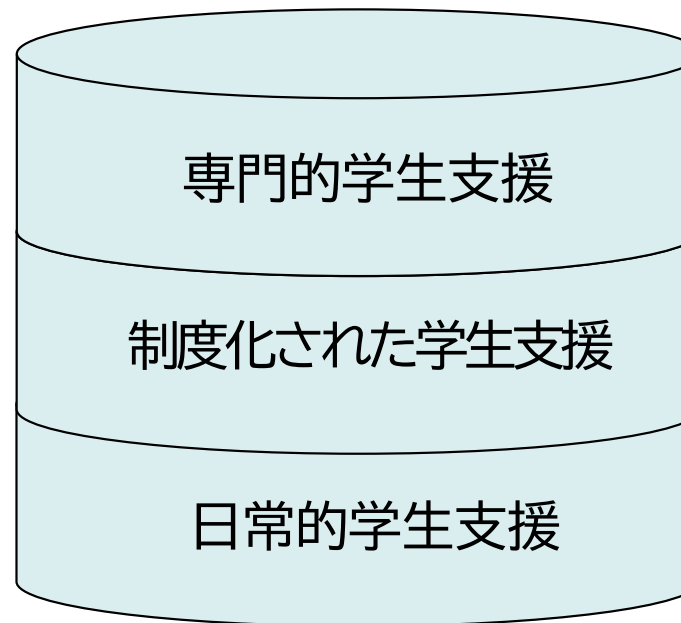
# 学生対応のデザインの方向性②

## ■ 教務の窓口は...



# 誰が学生対応の主体になるか

- すべて教務の職員が担うわけではない一方で、全く関与しないわけでもない
- 学生支援の3階層モデル



(日本学生支援機構 2007)

# 学生対応のデザインに向けて

- 自大学に関する情報収集・関係づくり
  - ・各種アンケート、アセスメントテスト、成績等のデータ
  - ・リファー可能な各種対応窓口との関係づくり
- 学生の一般的な特徴に関する情報収集
  - ・学生に関する全国／他大学のデータ
  - ・学生に関する理論
- 学生対応の実践知・理論知の蓄積
  - ・学生対応部署内での実践知共有
  - ・ケースで考える学生対応
  - ・カウンセリングマインドとコーチングマインド
  - ・「ティップス先生の7つの提案」
  - ・『大学の学習支援 Q&A』(玉川大学出版部)
  - ・『大学SD講座2 大学教育と学生支援』(玉川大学出版部)



# 参考文献

- 伊藤崇達(2009)『自己調整学習の成立過程—学習方略と動機づけの役割』
- 清水栄子・中井俊樹編(2022)『大学の学習支援 Q&A』玉川大学出版部
- 鈴木克明・美馬のゆり編(2018)『学習設計マニュアル』北大路書房
- 中央教育審議会(2025)「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～(答申)」
- 名古屋大学高等教育センター(2006)『ティップス先生からの7つの提案教務学生担当職員編』
- 日本学生支援機構(2007)「大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」」
- L. B. ニルソン(美馬のゆり、伊藤崇達監訳)(2017)『学生を自己調整学習者に育てる—アクティブラーニングのその先へ』北大路書房
- Chickering, A. W., & Reisser, L. (1993). Education and Identity, 2nd edition. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- NACADA: The Global Community for Academic Advising (2006). NACADA concept of academic advising. Retrieved from <https://www.nacada.ksu.edu/Resources/Pillars/Concept.aspx>